文本

九十

夏三秋一

大和歌抄巻第九

夏部三

題

夏夜　夏月　螢陽草　夏草
夏野　牧遠火　夏衣　扇
瞿麦　荒瓦　夕白い　蓮
菱　夏田　夕立　蝉
茅蜩　納涼　泉　氷室
夏鹿　夏出　晩夏　菖蒲根

○夏歌

建保元年百首　光明峯寺入道摂政

夏の池に河よりながれ入る水の音
千五百番歌合　後鳥羽院御製

夏草のとしをつもれば水もたまりしらかわの水の
弘安三年松梅千五百首　安嘉門院四条

夏山の高のうち火燃立て常よりつゆの夏のうら風
百首歌合　後鳥羽院御製

夏草もむすぶの露のうちにゆくゆくの月の夏の夜の
十題百首歌　後京極摂政

夏の来ぬ花とはなるる時ぬ

六百番歌合 夏部

建久二年百首の 前中納言定家

大井川みづのこむもとをかたくこそ思ひたえ

六百番歌合 夏部 程

夏の来てかすみもはてぬ水のうへに花ぞ残りの数

○夏月

千五百番歌合 後京極摂政

歌

雲のうへもすみ渡りぬる夜のよはの山の端の月

光経五十首の合 同

郭公なくなくかへるまつ成に成まさるよりの新しき山の端

文永十年毎月一首中 民部卿為家

歌

雲のうへの月夜の月さしいでぬるかたをしたのみ

建仁二年水無瀬殿六首 上夏月 中納言定家

たなびき雲のうへの月のこゝろさすかたをしたのみ

家集

清くこそ神もうけたまへ夏の月をみてかはらぬ

寛元々年百首 夏月

春議為相

約束しし山のまの月をまちわびて新しくこそ月は出る

乾元々年仙洞百合 夏月

神よもろく神よすさ　荒中納言為兼

三百六十首中　たちけるみそぎを月に　[illegible]

新古　夏の秋すなてる月をあまのとわたる舟とそ　[illegible]

夏六中　法眼源全　[illegible]

夏　水鶏なけの水に月はさして氷もあへぬ冬の川

一字百首　荒中納言定家

夏の月　[illegible]　家集　夏夜　月

かりそめの夏すさまじうすうすと　[illegible]

百首歌の　或子内侍

月の夏　[illegible]

千五百番歌合　[illegible]

[illegible]　後二位兼経

六百番歌合

すもりのひとの[illegible]

六帖部　夏月　[illegible]

夏の月　[illegible]

保延二年家[illegible]合夏月

高松院右兵衛佐

夏の夜　[illegible]

久安二年六月[illegible]合夏月

夏の月　[illegible]　[illegible]

同

まちてさらにてやみぬまの月

同

夜月の夜まちてのすみあまの海

山家夜月　後鳥羽院

山里のこやのえだまよりもれて月のかげまちあかすなり

○紫陽草

題不知　橘左大臣

あしたさ井のやまぢさくこゝろ

久安百首御所

ゆふさるのちはなれ八重よりつゝ月の影まちあかすなり

家集夜月　後鳥羽院

ゆふさ井の花のしたよりてる月をまちあかすなり

題忘　千載十首哥合　憲

あしたさの花のしたゝ高つまてなるあきけ

千五百番哥合　同

夜もすがらつきのあしたさのしたゝ月ぬ

百首哥　中納言定家

あしたさのゆ年をまちあかすなり

拾集　永仁内大臣

あしたゝ月ぬ

古恋題　花院

花院一夜のあしたさ井ゆしきをくみてそらひとよ

同　信実朝臣

おちさるのひかりすくなきも川花とひとまもてすゝしさかけか

同　光俊朝臣

ませ川にやまふきのましわかさかなひらまされやまよそ

六帖題　権僧正公朝

早わたる人ハたえ川上に咲つきさるをちまけの花

○夏草

六百番歌合　前中納言定家

夏山の草かけそもてあかつきに小松か枝にひかれきて

同　法橋顕昭

夏草の野原の露のかけてそきつゝ萩か花すり

同　大蔵卿有家

夏きてそ野中の庵ハさえまさらかとしてたれかすまむ

同　従二位家隆

茂けき野ハ夏もゆかしある草の露にまかへつ花そおくらむ

承久元年七月八条入道太政大臣家歌合

夏草　よみ人しらす

うつゝの夏の草をもひとりわさふかき廂もみてぬかな

此歌判者　顕季卿　云右夏草ハしけるへきものを

永安三年経忠朝臣家歌合　夏草

[illegible]

前参議親隆
さやかなる朝露おきてかりゆふむそこは野の夏の草ら

同
草ふかこもしのされかきわけてとまりし小夜の旅人　正三位季経

文永三年毎日一首中
夏草の露けき中をすゝむまにむかしのせし道のやことにせし　民部卿為家

貞応三年百首夏朝
夏草は来のあるは野ゝ露そをきたる朝かな　光俊朝臣

六帖題
夏草はいくかよひちの末もしらなきそ草の出なる

禖子内親王家哥合夏草

よみ人しらず
夏草を払はすなれはかりにはせむいつくゆきまし山里乃た

寛治二年百首　藤中納言定明
遠山人あつまとくらもやけしの夏野の草葉しけりけり

三百六十首中　うた
夏麻の下葉の草は茂けさのみは目にもまさる所かな

同
大原やせりのこむらわけてやたちまよふすくさそ

同
わすらるゝ草の茂みのかきまよひ夜は茂る人のかりそまかせりし

家集夏恵　後徳大寺
あふのみの夏草の刈るとかへものひつ

寛治元年女御入内御屏風　従二位
森のかけ夏草しけるさとそしき山の井乃みつ

建保三年百首

前中納言定家卿

ふるさと後鳥羽の院の百首よませ給ふ歌

○夏部

六帖題

長月の内大臣

新古今

夏ふかみ草刈そめし栗津のくまもしるき

家集夏百首

後鳥羽院

をのつゝ萩咲ぬ秋のきぬぎぬ

○鹿

百首歌

後鳥羽院御製

下くゝるもみぢの森の鹿の音を

同

かひなつゝきぬ秋もしるしの

千首歌

民部卿為家卿

人目をもの鹿の音を

同

ゆりしの鹿をわやまとらん

慈鎮和尚

住吉社百首

鹿の人恋ぬ夜ふかし

正治二年百首

正三位季経卿

鹿の人やまの谷尾をきつゝ

女房

藤原惟規

女ようつけつ

原

もしかさ鹿のゆり火をれ

建長八年百首歌合　後嵯峨院大臣

いつかはと人まちそめしくれなゐの花まつ春の
月　（やまぶき）

従五位上藤原朝臣

夫人後嵯峨院御母中宮の女房の歌
牧馬大夫

後藤中納言

牧馬大夫の姉妹なりしかば
河流れ時百首

宮内卿

宮内卿のさとの牧馬大夫
百首　牧馬大夫

[illegible]

[illegible]

文治六年五社百首　牧馬大夫

[illegible]

[illegible]

文治六年七社百首　牧馬大夫

民部卿為家

永仁元年内裏百合野亭友朝

牧馬大夫の姉や庶子なりし
百首　牧馬大夫

為家卿

牧馬大夫の子なりしかば
正治二年百首　牧馬大夫

宰相法師

心の子なりしかば
山集　牧馬大夫

同イ

[illegible]

後嵯峨院

[illegible]

○夏衣

三百六十首中

夏の日はすがたをかへてすずしきを衣あきけりと俊頼朝臣

永久四年百首夏衣

夏衣いとすずしきをあやめぐさ引てやすらふ袖のつゆかな

建保三年名所百首　後二位家隆

夏衣いつかはきなれしゆゆしきものゝあまのつゝみ

建久七年百首八首　前中納言定家

夏のゝ草はしげくなりにけりすゝき蛍の衣

六百番合夏衣　大蔵卿有長

梅の香ひとしほのさゝぬきて衣のさ衣

同　隆信朝臣

ゆふすゝき花ちらすきぬ夏衣

久安百首

きてなれし物たもとにあきかぜのあはれをかけよ夏の衣

永久二年四季百首　後二位隆房

蛍のもゆるすゝき衣のひとへ

六帖　定家

夏衣ぬぎかへてとしのをりをりに人をもなれぬ

○扇

六百番合扇　後京極摂政

夏ごろもたゝむ扇の袖かゝり

同　隆信朝臣

うちすてゝ扇をまくらにかりの床の上月と風と秋のものゝ

同

千とせ経る扇の風の絶えずして
はるかに数に新たなるかな

従二位藤原隆房

寂蓮法師

同

君の為人変もきてあらばやこれ扇の風の秋らもきる

大納言有家

同

神の門よりそかけて扇をしてまた出わかれ

従二位藤原定家

家集夏部

あつさしのぎをこの月の日をいつこ扇のてをあつくあれ

恵慈法師

永久四年百首扇

仲実朝臣

ちつつ君のいかなるかをやあまきの風のすゝらん

家屋忠房

同

まとひのるの川舟よりてる扇やつまとよりこのこゝろ

六条院大臣

同

手別にうあり色ゝ袖とは染の扇の風のなつかしき

和泉式部

家集

白露と宮きとしたる秋くさのりまあきの風にと

山寺水無月はこもるくよ六波羅の院法

きこうりまもるる人あきをえもこくをら

とそとそ

禅子内親王家歌合夏月

夏の来月ろうたのすゝ

法橋観修

さいらもその風まきのそたの

六帖題おなじ　　民部卿為忠

かくれけるあるじのたてまつりし扇をもみてへる歌

　　同　　同

旅にもちし扇の月のかげもあらぬ　　建久三年百首の合

うつりの舞にもむかし契りてあさの風のゆくへやまつ

六帖題　　定俊朝臣

しのぶもぢずりとつきてこそ　　水　供甲

　　同　　衣笠内大臣

月ゆゑにあはれとぞふる袖の露のすゑの葉ごとに

同扇　　権僧正公朝

あかずあきぬるかぎりとてとまるひのあるかぎりとぞ

○躑躅

六月内裏の歌さいりまゐらせけるときの　　紀宣朝臣

郭公　　新古今

ほとゝぎすなくやさつきのあやめぐさ　　忠岑

家集　　流布本

二条院のうへの桜をもりたまひてのちまゐらせたりし　　元真

　　流布本

歌の植うるをせつをもひそめてこの　　俊成

　　流布本　　新古今

かとりのやまとなるてこもりてうりをうへ人をまつ

家集なるてこ　　後拾遺朝臣

元永のたりまひんまろ殿にゝのけたまふ

と朝まいさみゆうさゆり大子桜さらはなての花
久安百首　　皇太后宮大夫俊成
夜の雨の苔地の上のうすはなきをはらはきもとをはらはけるこずえの花
寛元元年五月十六番大夫尉の合　　仲資朝臣
夜の雨のかすかのこずえはきはけるとなてこ
千五百番歌合　　後鳥羽院御歌
ちりぬるはなのまつの木けの苔はらはなきとなてこ
同　　小侍従
よそへつゝ人の人をみるよりてあはれとなてこの花
影定　　贈太政大臣
桜花のうすくもこくも見るとなしらん人はきてこひさめよ

百首歌合　　順徳院御製
久寿元年三月八番家方の合なてこ
元長卿
苔はよはの雨はなてはとはなてはとはけるなてこの
元亨元年五月十一日康申家歌合　　為兼朝臣
うすくこきはなてはとはけるなてこの
文安元年八月二日歌合　　為清朝臣
うすくこきはなてはとはけるなてこ
建長八年百首歌合　　右近中将源雅

夕立の露吹はらふすませの中にまきてさけるやまとなでしこ

同　前大納言為家

たかさごのまつもまれなりいく桜子のこのもとのをとめしさかりなり

見しらに　ひとしらに

五八
せこふらでこのもとのなでしこれたちまちゆきをみるひと

たのもしな秋の野もせの桜子のさかりをみんとこの花

住なれしの千すのことしもこゝかしこのさかりにひとたりさえ

ゆきの中の風さかりはらふみなそしこいまはさかりあさし

建保四年百首　前中納言定家

よそにてのかひもなけれ花もなくことのこそ夜花なさけとも

同三年家百首歌合　前関白左大臣摂政

ゆきしかのみや岩かねでしこ水にちらでをしきよはひよかり

同　従二位家隆卿

忘れていくなりしかはゆきし風の岩かげさけるなでしこの

まさしくもとゐの種やなでしこの花咲くらん岩ねの花

家百首　民部卿為家

吉野やたまのをかへしもくらきで垣根なでしこ花咲くらん

建長八年百首歌合　衣笠内大臣

しら露の玉かずかずのかいるもの桜子をさけるらん

同　前大納言為家

庭にうつしとひきそめでこのまつまへもあきかぜ

文永入道二品親王五十首　撫子

参議雅経

とく春やかをるみなみのゆきのまつ　やすやまとなし

同　　正三位家隆

花の色はうつりにけりいたづらに　わが身よにふるながめせしまに

長永三年百首　思ひかね　入道前太政大臣

白雪のふるのをきなとよまれてかなしこの花ぞ　加賀左衛門

大和なる唐はもかはる花ぞ　ときはなりけるあるもてしこ

永久四年百首　こ

見しかどもかなしこの花　源兼昌

夏哥中　　持僧正頼信

大和なるかたみとこそ心しるこの花のよきけつなしこの花

洞院摂政家百首　五月雨

五月雨は遠の下水ながれ　修成門女

同　　植なれぬ　この花

五月雨は神もあはれとおもふらん　藤原信盛

百首哥　　人なかりけるあやめ　花

常夏の花はなかりもとそ　家ぬ　信盛

久安百首　　藤原俊成卿女

ここ夏の花のいろ〳〵ちるゆくへ　秋のとなりやちるらん

天暦十年五月芳子女御前合　　中務

河のをも流れて年ふここ夜はいつものとけさはけふみて
なでしこ　らみなしけん
なでしこの花咲きむしろ夜のまにはらふともなほ露のおくらん　中務集
家集　瞿麦　小野小町
我が宿の花のあはれを誰に見せいざこの家の人を来よとき　源　家集
三つ折
なでしこの花咲きよりなしき人の来まじき宿のかき草
権中納言俊忠家歌合瞿麦　判者　後徳大寺
源仲正
露むすぶみなへしをそこなのかきよりも花のあさき
家集　古今(?)　なでしこ　同
敷島のやまとなでしこときはなる花そかれん

草中瞿麦
かくわけぬ葎の下にかくせどもこれはなでしこやつれと
保安二年閏五月贈左大臣家歌合瞿麦
為忠朝臣
みな草も生ひ茂るはなるなでしこのやまとなでしこ
福会大夫
露ふかき旅にも人の我をおもひつに葎の下に咲きぬるなでしこ　同
天暦十年五月菖蒲合
清涼殿女御
さかりにしなでしこのたえたるこれらもそろひに咲くこそ
長承三年六月為忠朝臣家百首会来恩
藤原道経
瞿麦

永享[illegible]年[illegible]月[illegible]日　[illegible]人[illegible]

病きさいをひとやきにかきこうはいこのこころをもて

同　法隆寺

旅宿をうつしまつりしかるのち仏の御[illegible]の躑躅の花

永久二年五月頼輔卿家の合躑躅

うゑやしなひまつる人やたまきはる　馬史朝臣

同　法性寺入道前関白家落路

よろきをせて家もおもすもとにかつらをのこころをの花

器屋入道摂政百首

民部卿為忠

よそなうゑそめし川の波の花の家集　長益門大臣

うゑ人やかさしにおもふ春の野のやまとなでしこ

七首三の中　摂政氏長

このうちよりなくつれなきそまくるてこの花

光孝五十首三の合　後京極摂政

ひこ[illegible]の花よりはるかに高きをもてやあるらん

千五百番三の合　[illegible]三位重[illegible]

つねもうつしさきにこのやまつ花の名をそ[illegible]

寛喜三年女御入内御屏風　前中納言定家

咲まさりやまの花の月をへはうきよあまろやまとなでこ

同

くれなゐのやまぶきのはなをよめる　民部卿為忠

ぬしらはる

中納言家雅

久しきの春のはるくるこのやまぶきの花

我せこが宮の桜もちらめども　為忠卿

贈紀女郎歌

桜ゐはるくちぬとくれなゐ

見渡せばむかしの野べのさくらばな

一昨日の夜の月にあへる

百代の先祖の桜さかりにあはんとて

元輔

○凡

小うちとけのこのはをよめる　桜井納言定家

心ばのこのはのうちにかくれてはなのうちにこもりてはるをまつらん

ちはやぶる人のをとこをこせうと

祐春

家集や果てしの秋つくりまるせそ

ゆるのこのやうなほれとまつてて

為忠法師

我このまびきまの春のこのはのこまをそうまる

桜井納言長方

家集

たかこ三国のうち六の一作にまさるほど
屏風歌
我宿のまちぜのそらにさくはなを
ちるとみるまでうつるかなしさ
左大臣
山城のこえまうちにくこそ
山寺に大臣家集
大臣家のうりけるときに内侍のかみ
すけよみてまいりしに大舎人
ひさしてもろに
ふる人にはすけのそこにをる
よ有けるいまはまたけるをとこ
をきてはこそ大舎人
まちてそとせりけるを
そこらをとりけるとそ

小大臣

いことはいまをいかりうもたてるものをさてや
賀茂社百首古今合 慈鎮和尚
命にたちとゆふ紙を大和
六帖うつひこ
百首のたちさのぶらいよ我をとしつるこ
文三の中
しらまも引人をやしらの
六帖題
しをひをまつらこのうらのこ
家集
しらの浦のうらもこそ
三盛

○夕顔

後嵯峨院

百番合夕顔

法橋昭

同

寄題法師

同

同

藤二位家隆

同

同

同

正三位雅世

隆信卿

同

卜部兼豊

夕顔

建保三年百首

藤中納言定家

千五百番合

同

同

建保四年百首

木のもとの植木をすきこもりの月のはてのころみ数
永禄元年百貫文色
民部つかさ
毎日一貫文
少納言をそなへゆるめたまはりたまふ
隠居百貫
うへすゑ植木をもしもの
家集ゆゑ
後鳥羽
山のもとのたちばなをすきかへすひく
百貫文
西行法師
おさへかねたりけるきたのもの

○蓮

濁ほとりふかくそまれはすけをもしすきへされ
建久元年六月一字百貫
文治元年五月百貫
文の日も
百貫文
百貫文
西行上人
慈法和尚

大宮院の御歌の花さくらこそ
毎月題中
民部卿為藤
池水にうつる月の影をみて
花の咲かとみつるかな
池のうちにてとりてる池のうちにて
夏の月よりの花の咲けるかな
千里
御同水上月
秋ちかく花のうへにみる水の
三百六十首中
夏の日をみのの山をたのもしみ
後嵯峨院
西園寺実氏
夏ちかき入日の花の咲ぬるに
後嵯峨院御歌
題不知
夕さりは池の波のあはれ
花の色を
秋水と波のうへにこめくこなす
家集
夕さりのうるはしい家にあるとりけるむかしの波の
長女院入道二条殿
家五十首
夕さりは池の花の
家集池映波芳
三条入道大臣
花中鶯言定家
風とうる池の花は夕月

建久元年六月一字百首

安部信定家

河うちんへのくもゐの池のはなのさきにけりを

六帖題　信実朝臣

春雨はいとゝもあつと花のかをにさくらの

大納言師頼

河院御時百首

をとめこのすゝきの池の岩の根にはなの咲ける

権中納言師時

建久元年六月一字百首

花中納言定家

花の色のあらしにはなりもりわひにしの水とはなる

○美

題不知

人しらぬ

ひとよのきくの池のなかれにて橋やなる神世

ちとせ

ふるさとのきくの池よ美をつむ神世よりなる

正治二年百首　後鳥羽

ふるいけのあやめの池よ神世にてひとすきにこそ

殖物百首　藤原為家

あやめぐさたくもさしてひとすきにこそ

千五百番歌合　後嵯峨

ことひとの美のうきなかるまよかるはなの

六帖題　信実朝臣

ひさしかりしは美のうきつるよかるとなれて文の池

六帖題

民部卿家

いかにせんとやなきとなりもはてしらぬ

○夏田

建仁二年和三家歌合

藤原定家

五月雨のふるのの風のうちなびくいねのなびきの

建長三年毎月一首歌

民部卿為家

さらしたれかけさの田の白玉

宮内卿

後二位家隆

山さとの門田の稲葉ふきかへす夏の朝風

建長八年百首歌合

藤原伊嗣朝臣

夕月さびつる田の稲葉ふきかへす家をはなれて

六帖題

夜半の月

しらつゆはたちかへりしかしかの田のすがるひくまで

冬

正二位知家

たづの鳴くたかの稲このかの五月雨ふる時ぞとをの田植歌

○冬立

六百番歌合

大蔵卿有家

冬ちかしかくれぬ鶴のこゑ

冬

風さゆる初の下葉ちりしかれ添へく自ら冬の立

新古今

藤原定家

ちるもみぢ

ちるもみぢ

ちるもみぢ

ちるもみぢ

正治二年百首歌

後鳥羽院御製

[illegible]

家隆卿

[illegible]

[illegible]

千五百番歌合

少将俊

[illegible]

[illegible]

建仁元年九月五十首歌

藤中納言定家卿

[illegible]

永久二年宮百首

同

[illegible]

建保五年百首

同

[illegible]

[illegible]

毎日一首中

民部卿為家

時雨をたづねて

六帖題

[illegible]

[illegible]

建仁二年内裏歌合

藤式部卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新元年百首

同

[illegible]

家集

清輔朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清輝定国

[illegible]

六帖題　長能朝臣

[illegible]

同　光俊朝臣

夕立は今のこきは木葉もあらじ　（新古）
百首歌　信実朝臣

かきくもり山の端とみるなかにまた夕立雲　（空イ）
宝治二年百首夕立　同イ

[illegible]

建長八年百首歌合　同イ

夏のあり[illegible]　（同イ 拾）
同　光俊朝臣

[illegible]

夕立の雲のうへをとりかけてはまの[illegible]
家集　中務のみこ

[illegible]

○蟬

建保三年名所百首　後鳥羽院女

[illegible]

同　権大納言

[illegible]

家集　蟬を　後頼朝臣

[illegible]

我宿のはまゆふかぜのみぎりにはやくもとまるや
百首哥兩度撰
夕立の雨降ぬとよ山風に
永仁二年内裏百首哥合
木陰のもり涼しき風とうよ秋はいまはせみの声
千集百首撰ノ撰
村雨の降ぬとみえて秋山のせこるはしたる
蕭洒風雨之撰ノ蕭索風雨天蟬聲苦秋ト
ふれとりあやまくよりあくるまてはの
家集
心さしのあるのとのたらきまきまきまの
歌領和尚
雨もり上人
千里
撰ノ蕭風秋
時撰のしたくのまゆふ雨の秋を
寛平后宮歌合
ことの葉をひきかへてはかへるせみの
康平二年三月内裏歌合
いつとなくなくもうつる山の撰
長治元年六月皇后宮歌合
たのもしこと思ふまくこと撰ノ撰
永久二年百首撰
神ふるのれの松は時雨せこの撰
長元六年七月六人合撰

山風の梢ひくまでなくせみの
長治元年五月源慶 擬物語 材木内蝉
俊賢法師
メくけの雲の材よりなくせみの
長久二年五月度申和社古内松家若木
三の合ゆきの森のせみを
みんなしたる
蝉の木のうつりかはるこの日のゆきの森 材木
同三合いとのりの蝉
ふるのいとの森の蝉のせみの
彩木色
良意法師

ふるいとの森のまし蝉も時をまちかはるなん
永久元年百首蝉
仲実朝臣
おなじやしろたちくれの蝉のしたくれの蝉
久安百首
たゝ大夫頼輔
ちくとたくしたのしの蝉のこゑ井の松のもとに育けり
寛治五年有隆二位家原親子家歌合蝉
橘成元
二ゝせみのこゑのまことゆるしたるせのこゑまけまさり
家集蝉 未通
源仲正
夏山の梢の葉あり夏山のこゑひくくまでなくせみ
せみ
俊恵法師

山彦もこたへわかぬ谷の音に　文集百首云々　同

○法皇法勝寺文集ヲ
ヲ[illegible]れば蕭瑟凡而天籟声
容秋[illegible]

小金山寺の梢より時雨もてかすかなる夕立の音
　　八条院之金
　　紀貫之門流安嘉
　　公安百首
せきのとをこゆるこゑかとおもふまでかすかにあつさをもとむる
　　法性寺入道摂白
　　法性寺集歌
長月の森の梢やたちくもりあめをもよせぬ夕ゆふ
　　建仁八年百首云々合
　　正三位忠定
夕さきい松風すさまじきをもれ森の梢よりはいるけ
　　前大納言経朝
同

蕭瑟の[illegible]て夏山のまちとをけき時雨
　　たゆ中将[illegible]
同
ひとかたの時雨のいとなくさむしらるるまきの言葉をもたる
　　後九条内大臣
同
たちかへりあきて年をへん時雨のいろ羽衣
　　六百番云々合歌
　　正三位季経
ひまもなくもみぢをやきそく時雨かな
　　大納言有家
同
雲井までひきやすらんと夏山の木ぐらたき時雨のけ
　　古今門大臣家十首云々合歌
　　宋[illegible]法師
秋風のかよふ[illegible]の梢ゆゑ[illegible]

建長八年百首の合　後九条内大臣

松をうつしこのゝ山のすゑけてはせみも猶なくこゑ

弘安元年百首　同

ゆつるはゝ柳のせゝもあきかぜ吹ぬ山

百首うたの上句　寂蓮法師

ちゝ木ゝはやしの弱ゝ木ゝ

せみ

ちゝはたきゝすゝんはなくこゑ

寛治五年十月後二位為房卿歌合

ゆふ人ゝ

蟬

ゆふ陰のゝ夕ゝ寺ゝ

正治二年百首　法師光

山川の岩ゝとゝもゝせゝのゝ水ゝ

千五百番歌合　寂蓮法師

せきゝしゝ山下水ゝ

同

あゝゝくゝゝの松をゝ

建保元年十二月南殿百首　才三のみこ

宮ゝゝゝ松の緑のしゝ

海辺宿次百首　守山

ゝゝゝ

永十一年毎月一首中　参議為忠

ゝゝせゝの浦ゝ

ゝゝ山のゝけゝ

民部卿為忠

千首哥

文治の初めとけく時雨の時雨

文治元年百首中

百首哥

行末の松の山吹風はこの比せゝの山里にせゝのうつろふ

建保二年二月文字鑑百首

別きつゝ扇の風もいるゝ夕のきゝは

しをつくせみ

○第

冬

雪

冬ゝ人ゝ

少さゝ

恵けゝ

百首哥

古今伝授製

ひゝの時雨の山風

建保二年百首哥

十題百首

お中納言定家

建長八年百首中

民部卿為忠

いさゝ物そよきもきこえて山の端の月くれはてゝのこゑ

文永六年毎日一首中　同イ

小倉山山路にいそくひくらしのこゑや夕をおもひしるらめ

建保三年名所百首　従三位行能

大江山夕さらぬまのあたりに入日すゝしくひくらしの声

同　藤原康光

大江山我しもさきにとまりけり人の宿やとかん蜩のこゑ

新後撰夕

千五百番歌合　後京極摂政

蜩のなく音は風をさきたてゝ入日すゝしき岡のへの杜

同　従三位保季

ひきゝすく真木の小松の木の上より風さそふ蜩の声

賀茂社百首歌　慈鎮和尚

秋ちかき梢は蝉の声たえて松風やこし蜩のこゑ

六帖題　信実朝臣

夏ふかき木すゑの蝉のよりもさそ立山かけの蜩そなく

○納涼

建仁元年歌合松下晩涼　慈鎮和尚

木のまより月をも風にさそはれて松の下かけ秋のやとりぬ

六百番歌合蝉　同

夕まくれきしの松の木のした陰あつさは蝉の声に残りぬ

南山百番歌合　同イ　慈円抜

[illegible]

信古社百首

[illegible]

家集

[illegible]

同

[illegible]

重之

三百六十首中

好忠

[illegible]

六十首寄　建仁元年

[illegible]

[illegible]

建久八年百首　頼朝卿本願同秋

[illegible]

後京極摂政家詩歌合水邊月秋深

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

慈鎮和尚

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

岩の上にねひきてのかれ山の松吹く風はすゝしかりけり
慈鎮和尚

夜山の嵐をわきまへそりみてすゝしきつる布引の瀧
前中納言匡房

神垣のみそき川の夕すゝみ神やなきことよるにかへ風
影しるし

泉川すむこの水はあらしまさるなの岩こゆる音
同
俊恵法師

みなせ川の柳はけふ夕風ふきたつる色もなし
二条百首にて二条納涼
後京極摂政

日くらしの松のしたかけすゝしくてよるはさなから秋風そ吹く
陰ふかき森の下水一木のかけも秋風そ吹く

野中なる松の木陰をせき入てむすふ清水の底もすゝしき
建保三年百首詞納涼
前中納言定家

天瀬山ゆきつきかくれ下かけに秋風そ吹く
四季百首 山
すゝしさを待ちかねたるむすふ手にまたきも秋の風そ吹く
水邊納涼
権中納言雅経

松をはけさそ秋のこゝろ
同四季
夜山の岩のかけ川の水上て秋は来にけり
同
権僧正公朝

下くゝる水をあまたの川風の松にかよふ秋風

永仁二年内裏五首水邊夜氷

前中納言為兼

百敷や汀ちかきさゝれ水かつ〳〵こほる月のかけてすむ

野亭夜朝

朝風はさゆる草木の末毎に夜もいつか野邊のすさ

嘉元々年百首

月とさへ人も山松の木下に清水むすひて夜そすゝしき

嘉元々年式部卿親王家続千首當座

参議為相

すゝしさはつくしとりつ山さとの松をもつ風の音さへ

貞應三年百首夏川

民部卿為家

たつ河はゆふ浪のすゝしさて行袖 こすゑの
あつさをさるといつれとそよふる

避暑

後鳥羽院

水ひろしあつけりそさこそよ吹くる風さへさゆる庭の井のもと

夜ふかき中きのわけよりをきいろとらすみを

ひさりはうそのそとかつけるよしまの萩原風さらは

前大納言為世

山あひの苔をうつもり人のすきいつる風を涼みけり

晩しらぬ とまり人しらは

權大納言

橘の山のすそよりやとる人のまとみる月もすゝしき

安元二年閏九月哥合水邊秋月

源仲經

早秋

あさからぬ
あさ〳〵すゝめそみ
あり月の日かけ秋と前の
まほゆくしゝかな

月やどる山井の水をむすぶ手にすゞしさまさる玉ぞこぼるゝ

永仁元年書題百首　藤原為藤

石の上に落つる滝のしぶきまですゞしさまさる玉とみえつゝ

嘉元四年十一月当座百首　後三條内大臣

涼しさはかはらぬ野中の夕されを松が井まくらとりやむしろ

家集夏三十首　信実朝臣

風かよふ野守の庭のさびしくも木陰の下に秋とすゞしき

文保三年女院入内屏風　後京極摂政

すみなれし入道は友もなく十そぢのよつくる森の老の家

建保二年内裏十首哥合　僧正行意

夕すゞみ杉の木かげに吹く風は山をけはしく秋やきぬらん

前大僧正入道二品親王家五十首　前内大臣

まつ井する山松かげの夕すゞみ秋をはらふ月のかげかな

正治二年百首　中三ノ親王

風ふけば松の木陰の夕涼みまだきさそふ秋の一声

同　前大納言隆房

風わたる杉の夕ばえはますゞしくてたゞ一時の秋ぞしき

前大納言忠良

千五百番哥合

松風の夜さむくなりき秋もちかきの塩竈

同　法橋顕昭

結ふ手のすゝしきのみか岩そゝくたるひの音も夜はきこゆる

○泉

後鳥羽院屏風歌玉ノ井

皇太后宮大夫俊成

岩ねもるたまえの井の涼しきはちとせの秋を松風そふく

五社百首泉

みつはけるあかゝのいし水結ひあけてもゝの人の心をそくむ

三津清水の岩もるいをとよろつ代はけ枕の下のいはにこそしれ

永久四年百首避暑

仲実朝臣

大空にあかゝぬ月の水にこそ夜はゝをとめも物そしるけれ

堀河院御時百首

前中納言匡房卿

八月むすふけみつの下にむすふ手の夏の清水夜もすゝしき

同

修理大夫顕季卿

むすふ手に扇の風もわすられておほろの清水すゝしかりけり

同

源俊頼朝臣

さゝ井の本の陰に雲ゐの夜をかさねてもすゝむけりとも

久安百首

花園左大臣

むすふ手に扇も夜もわすられてやすらふかもすゝしけれ

後嵯峨院入道二品親王家五十首夏泉

前中納言隆房

夏はたゝ秋のすゝしさかよひけり月かけもるの下の風

百首泉

従二位家隆卿

月をまつ岩もる水に秋の色
建長八年百首歌合　信實朝臣

苔のたて岩の下水とくるみち
百首歌　寂蓮法師

山ぢのきりに松ふる村雨
泉殿夏梅

高い岩もる水よ行くくらもさや夏のわすれ
樹陰如秋　源仲正

ふる雨ぬれ水ゆくこのもとのけぶり
順徳院御製

○氷室
百首歌

かきりあるいのちの雪のきゆる日もあるる物をの山の下
同

ひむろの梅とうまのゆ部
建保六年内裏歌合　慈鎮和尚

さいかちとい山城
文治六年五社百首　氷室　藤原定家朝臣

身を石に本を後に
岩ひくるきひむろの松
岩ひくや松ふる雪のきゆるとのひむろ

冬なから岩戸あけても氷室山夜はさえまさる関路なりけり

春もなを夜さけぬまゝと氷室山冬をとゝめてとけぬなりけり

祇園百首

神の代にまもりめくるものなれはいきたる氷室の氷なれしる

正治二年百首

神代より君をも神とまもりけむやまとの氷室のとをせ

正治二年百首　源師光

かしこきや君かためにとみ年もいくよちきる松のこの氷室なりけり

家集氷室を　俊頼朝臣

すへらきのみことのすゑしさすか世にいくよしるらむ氷室あり

堀河院御時百首　修理大夫顕季

夜の目にもかはりなりける松かさきこほりやむろのしるしなるらん

同　中納言国信

君かためよはひかけつの氷室山いくつもりける氷なりけり

同　権僧正永縁

名にしおふ氷室の内はいかにして千代の氷のとけぬなるらん

同　仲実朝臣

つけの野よ太山のかけにむすひける氷室そ今も絶せさりける

文治元年七月百首　民部卿為家

見よかし世はあらて氷室山とけぬためしをなほやまちみん

六帖題にて　中務卿親王

あけくれのつかのみかりそならはしや氷室のあとのさえしらぬめり

貞応三年百首氷室　民部卿為家

せきのもとにあるこおりの水をあつめて氷室
永元三年七月百姓作り無事にて
この里に氷室もとめ
長治二年百姓氷室
長蔵御寿林書
光門前月遊
後三條天皇
三條天皇
氷室
氷室
氷室

○夏鹿

百首歌合 建久八年百首歌合 弘安元年百首歌合

後九条内大臣

夏の日の照る

夏ちかの野の草の葉しげきに小鹿の声

建久八年百首歌合 同

夏の日の照りつる空のすそ野よりかすかに

弘安元年百首歌合 同

夏の日の照りつる空のすそ野より

夏の日の照りつる空のすそ野より

夏の日の照りつる空のすそ野より

夏の日の照りつる空のすそ野より

千五百番歌合 後二位家隆

百首歌合

夏の日の照りつる空のすそ野より

千五百番歌合 後京極摂政

萩原やしのだ山もかすかに鹿の声

建保三年内大臣家百首

夏の日の照りつる空のすそ野より

家長卿

夏の日の照りつる空のすそ野より

大納言有家

夏の日の照りつる空のすそ野より

千五百番歌合 後二位家隆

郭公こゑたえずかきなる梅の花のきりくちを

百首歌

順徳院御製

かへりみるいつまてすゑのきりくちを梅の花やもとの人

同

心なしの植ゑのやとの夏ふけてたれともとめぬ花のもとに

五十首歌中

同

梅ちるき梅の花の植ゑ梅の末むすはるよりもちるを

寄草花所

清輔朝臣

梅の花梅の花ちるをもとめてきもとの人の

家集夏歌

民部卿為忠

夏ちるきわさちる遊のきりくちを末の下枝をきもむ

千首歌

同

○映夏

三百六十首中

萩のさかりの時のそよめく夏をまてあれなり今

家集六月十日秋の世ちよりの月

ときき秋

しをりしら萩のくれの色をとりて秋をひよ入やうん

家集

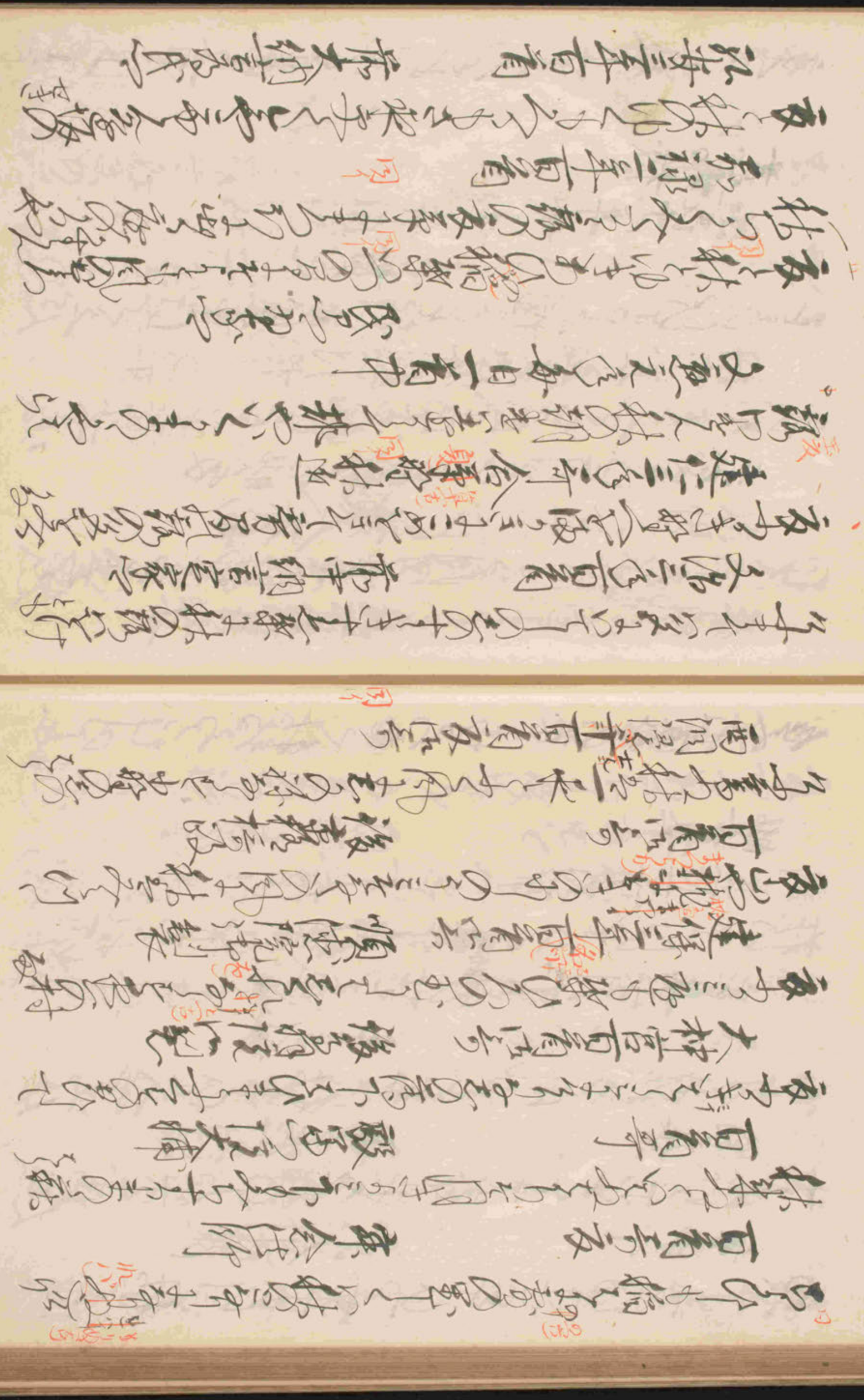
をちをけ

十ちみけるこゑをくさて出て水る池のおいすをちる

夏のさて

よみ人しらず

西へくふ夏のゆきせをちひつやてをひき秋をそまま



[illegible]

○芸和後

[illegible]年女房風

貫之

[illegible]

同十八年[illegible]屏風

[illegible]

[illegible]

天[illegible]三月男[illegible]家[illegible]合映歌

[illegible]

[illegible]屏風[illegible]

[illegible]

[illegible]

同

いかへのさらへをけうかうさまのみそきよみひくとそきく

みそきを　　顯仲卿記

ちとせやまたなうしのみきよ　　文治元永記

千五百番ヶ合

みそきして秋のあさはらの　　隆信卿記

布引百首ヶ合

布引の滝のみそきして　　法印定覺

文治元年五社百首反報

伊勢大神宮　　同

伊勢内宮　　同

同

同

法橋昭

[illegible]

天治二年百首

三条入道大臣

文治六年女院入内御屏風

[illegible]

建仁二年百首寄合　法印定家

[illegible]

柿本朝臣百首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

川の世を祈るとて人々つみとがをつくりて
雲百首 祝 前中納言定家卿
をとめ人のちとせのそでをしぼりきり
寛元元年女院入内屏風 西園寺入道太政大臣
ながき川わさの水風吹なびきけり
川 集三十四 中書王 前中務
神代のきしの川へよりてもとの秋をしぬぶまつ
集三首 中の君和歌 後鳥羽院御製
うきをしるらん大海の水よりきて沖のあまの釣舟
文暦元年七社百首 西園寺入道
雖波浮ケ水ケ月の比後鳥羽院
いそのかみの川の名をとへばたるる神やらん
文治六年五社百首 皇太后宮大夫俊成
ながもとの川よりきてあらの神よりなる
寶治二年百首 修九条内大臣
府のもの水上ながれていつを川二度ゆきもとらん
川 後二條殿
水ながれの比後川原の人なかよりの心乃宮の時
川 隆祐朝臣
比後すこしいなつのなせ川あやめ神もまもらん
百首 三
比後をおくれのあさちのひとりなるあやめ神もとらん

久安百首

四季　藤中納言隆季卿

もみぢ葉のながれてとまるみなとかわ
しがらみかけてせきとめてまし

文治六年女房歌合　後鳥羽院

夏の月をよめる　藤原雅経朝臣

月ぞすむ　同

万代をいかにかかけてながすらん
ちぢの人をもとどめてまし

後鳥羽つねこの川原に立てふとをそれ行人
家集たえけるなかをたづく

元亨

後鳥羽院御歌

天文三年七月廿三日　猪家屏風

六月祓

ながれきつ高瀬の川のそこのみなかりしかへりて
家集にみえけるかをたづく

伊勢

二年の間はまるけきこと
毎月一首中
ふれとともゆきけてこそ
ながきかりのたちのもの
六帖題

いろくさの庭のたちてまたきあさの空

文治二年毎月一首歌中　同イ
ちゝ井の川せよりひきてきて　そのゝ井の水
同五年毎月一首歌中　同イ
ゐ井まちわさとやいつる大井川ふかくきるなる
弘長元年毎月一首歌中　同イ
六月のうちのきりのやきせよさきもすき夏の風
家百首歌
山川よりゐ大わさらをたてゝ　同イ
文永元年七社百首歌
水無月やあさの高枝よりあきけてなびけさいはやうん　同イ
貞永五年百首歌　同イ
年あまつ雲ちのものうちてきりはなくもりあり

家集
川あひやきうれ川ゆ
百首哥
府の歌のわさ
百首哥　恋和歌
山桜川もゆりてあさけのあきはをれやうん
天仁二年十月歌
みそきすゝ川せよりつゝ
治暦三年宮月定綱卿百合六月恋和歌
たきつせよゆゝけめ

安嘉門院家
後二位中納言
林賢法師
源忠季

堀河院百首花和歌

後鳥羽院御製

はるかすみたちのぼりてよしの山
をのへのさくらさかりなりけり

文治五年百首

前中納言定家

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
ひとのなかなる恋しなりけり

同二年百首

法後鳥羽院御製

ひとこそはしらぬ涙のかずなれ
ひとりぬるとこのあけぬるかな

百首寄唐法後鳥羽院御製

いまはせんかぎりのさきの夜ぶかく
ひとりぬるとこのあけぬるかな

久安百首

待賢門院堀河

ものおもふ人のなかにぞ
ねられぬる

六帖題

皇后宮

おもひかねわがうちのちるさくら
ひとりぬるとこのあけぬるかな

同

さくらばなのちるをみてよめる

長能

ちるはなのなごりをしのぶ
ものとかは

百首歌

慈円和尚

法後鳥羽院御製

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
ひとのなかなる恋しなりけり

千五百番歌合

隆信卿

ちるはなのなごりをしのぶ
ものとかは

文治六年女院入内屏風

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
ひとのなかなる恋しなりけり

天仁二年十月影季家歌合

後鳥羽

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
ひとのなかなる恋しなりけり

六月のつごもりのくれつかた

有家隆仲

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
ひとのなかなる恋しなりけり

同　中流入道左大臣

六月はつかとしはてきつゝめ事をいのりそきたん　氏三位季経

正治二年百首

ちゝかつ（たゝかつ）ちはしの川原よりいとゝしてゆふくれて雨そゝ（たみつ）

建仁八年百首与合　従二位りやう

たゝみそきゆふくれ立岡川さきのせきりまはさる　藤中納言家定

千五百番歌合

雑ゝそきあすゝ御茅はゆふくれひくゝまの川風　藤左大将

同

法橋ちかまさ

法橋ちかまさ　ゆふくれ　ひくゝまの川風

同　西行法師

法橋すゝあゝの川波ゆふくれて秋とゝせまゝ浦波

同　後京極摂政

七夕乃あまの川原よ憑せゝと　秋をしらるゝそきすゝ

〇五百二十四

夫木和歌抄巻第十

秋部一

題

立秋　初秋　残暑　七夕

立秋

建長三年九月十三夜千首の合の初秋歌

秋来ぬと聖明の草木もそよめきぬ　　陽九条内大臣

同

野なかのしき秋きぬとやまもりの露の玉をとらん　　藤原内大臣

同

むかしの家のそなへも時ぞまひく秋の来ぬ　　民部卿為家

同

とやこれ秋をそ鶴の声ぬけ出ぬ　　正三位知家

久安百首立秋

前大納言隆季

ひ[illegible]の[illegible]

同

山さとい遊の村雨らうをして時雨の秋の夕

家集　旅泊秋夕

うてしの浦波よ秋や哀あるらん　海人の袖の

六帖部

白妙の衣ほすてふ山さとの秋の夕の風たなびく

長月同大臣

同

と朝の間は以前の夜の嵐ふきまさる秋の夕

貞応二年南庭百首　村雨秋夕

ときいれぬる中の時雨の秋の夕

三百六十首中

民部卿為家

うたた

うらうらする秋の末よりうら世の神もひ

家集　六帖部

和歌六部

こそきすもあさきり松の秋の夕

摂州院百首　立秋

結びて行く神のさむきの我国ぞ秋の夕

中納言国信

建保二年内裏歌合　秋風

順徳院御製

秋の夕さむき衣ぞうすきさらぬ

同

秋の末の風よりもうらうらの神の

百首歌　秋使

常盤法師

吹ぬる風の音さへすゝしき夕ぐれの萩の上葉を
新撰三百首早秋
秋風
思詠
いつ[illegible]朝ぎの風の涼しさに
思ひ入道摂政家百首
立そめしかたの秋風ふるあさの衣きりぎりす
同
秋の夜の
夜原左宮敦
影ふけ
蟲の鳴のうら吹ふく風の音も物すさまし
千五百番歌合
後鳥羽院御製
風の音よ秋ふかしかし立田山紅葉の色のゆくへ
慈法和尚
同
風の音よおちくるのこの森の秋の夕ぐれ
同
秋風の立田川原の柳ゲ
七條門院大弁
同
秋来ぬと一夜をかよる蟬の声の緑も色つきぬ
時子朱大弁
同
[illegible]秋ぬ[illegible]
宮大后宮大夫後鳥羽
同
[illegible]
[illegible]
同
秋風に一夜ばかりの[illegible]
[illegible]法師
同
[illegible]
[illegible]
[illegible]

先ごろまでこれに為すべき事の世間はおろかく秋の縁
同裏に金秋十貫文 同
夜果てわるやうなのもの神さまの秋の風
文治六年又 社 百貫
身大后宮大夫後成
ゆうとけさい殿のうきうる秋の夜よりつゆを有けり
春の夜入道三位殿 寺歌 同
文治六年百貫
正治二年百貫
前中納言定家
年ごとに秋のこゝろ殿もあるかはるまくひく袖の名
同
前中納言隆房
ながらや始めてこゝろ白き三日月の月も秋を作
源光
ゆうとなくこゝに秋はなかりけるとこゝに来ぬこゝに秋も
文治六年又 社 百貫 立秋
身大后宮大夫後成
しるれこゝに秋の夕の雨も後時に光の色は秋をまく
すゑ風秋の初風吹ゆるきりぎすの涙の袖
老ゆる五十貫文 合
寂蓮法師
秋の来ぬこゝろ秋のまきの葉の上に
百貫 立秋
隆房卿大后
合 ゆうもてこゝに秋の通ひ秋やさねん
河院御時百貫文 秋
大納言通光

冨のかり家をもとも萩の葉の葉の葉のうへにそよぐ秋かぜ

同　民部卿為忠

家隆卿の小藤わらの家の朝の庭の秋萩

同　従二位為氏

秋萩をとはぬ人の家にさけとやもとめ萩花もあるらん

同　従二位為氏

月ゝ三伊夏之月　月ゝ高ゝ夏之月　月ゝ野ゝ

長月の夜の下風吹ふかるゝ

同　家長卿

門田ゝ下ゆる水苗ゝやとりもとめく秋きりの

同　隆祐朝臣

吹風も今ゝ立初てゝ夕ゝ涼めあのゆふ雲ゝ

秋の川波

初秋

建保三年名所百首　藤中納言定家

玉葉

四月のゝ日の色ゝ立山けさ見ゝ本の白雲

文集百首大底冥府若能中腸断白秋天

はゝ雲山ゝ高ゝ高ゝ言ゝ雲ゝ

同院御百首早秋

久方の天の川ゝ水ゝ秋ゝ

初秋百首

雪葉

立田姫ゝ風の音ゝ秋ゝ

後鳥羽院御製

秋はぎ

秋はぎの中　仙本ニ ゝ

後鳥羽院御製

芦麓の夕ゝ雲ゝ

寛元ゝ年百首秋の初秋

天満宮二てう立つてあつたものの代りの長さて秋もみてけり

建保二年秋十五首歌合　藤中納言定家

新院御歌

ちさかをしたのゝ雲をとをすらんひくゝ雲の秋の風

建保三年毎月一首中　民部卿為家

月ゝ雲のこゝろの月をのこすらん秋の来ぬとてなくなくぬまくさ

同　洞院摂政前太政大臣

秋の来ぬとてなくなくぬまくさよ秋をすてさるあるまの露

竹のこのこゝろきよくて秋きてなるきよすゝ風そゝく

家長朝臣

文暦院入道二条殿五十首歌

○秋夜月　藤中納言為家

雲井なる月のかゝるは秋の夜の月をはなれぬ雲のかゝるは

同　秋夜

野人とゝれい家の初むしさきてちゝよい秋の多くまに

信実朝臣　伝二作如也

宝三位入道家

秋やとゝ多い虫はきとゝ秋の夕の月の影

影不定

伊勢

秋の月めとまきよゝ見たまもあさゝ秋の風

同　藤中納言為氏

大海の松のくゝもゝ中ゝ秋の風

建久元年一字百首　藤中納言定家

あきつ山もゝくゝの雲の秋の月ゝ秋のさゝ

正治二年百首　　藤原定家朝臣

なつのはじめの月まちいでてすずしき秋のかぜ

同　　宰相法印

よもすがらかぜのたもとにすずしきは秋のかぜ

千五百番哥合　　修成門女

ふるき郷にかよひなれぬる秋のかぜ

初秋の哥　　後二位家隆卿

秋たちてまもなき夏のよのうちはやさしひさ萩の露かな

題不知　　安貴王

秋たちくるいくかあらねどなつの野のはなのいろにぞ秋はみえける

初秋の　　三位経房

東海のいさ波の里になれし秋のなごりぞあらそひかねぬる

家集秋の哥　　恵慶法師

ゆふぐれはいかにとてかは秋はあるとこたへて

家集秋のうためつらしき歌のうちにて

為秋初

夏ぎりの秋たちてのちはいつしかと有明

天平元年二月賀之家哥合初秋　　人麿

秋もなほ夏ぎりの雲にかくれつつ

同　　同

すずしくこえてやまのはのつきのかげ

延喜五年二月有平定文歌合初秋　　たゝら秋

時雨よりあとにあらはれたる雲のかげ

たゝ大臣家賀屏風七月廿五日のよりて沈まし

元暦

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出でしひるまさ三月のなかばとすぎぬ秋の色をうたん

同　　二条院讃岐

三の月のえだのうすゆきゆらりゆらりとふるとしの秋をそなたの

文永十五年毎日一首歌

又ま言一数多つくまのうるはしかりしいつる時

三神和歌　　野長明

ちはやぶるかみのうたはしらぬまの月のうらはしらぬまの秋

千五百番歌合　　藤中納言定家

又言いはのこのもとにたちのこれる秋をうらとなるこの

家集初秋　　従二位家隆

秋山まつりのうちのこのもとにかくれぬ秋をうらとなるこの

寶治千首歌合初秋月

民部卿為氏

天川ふるさとのまのいつとなく秋やきぬらん

光明五十首歌合　　後鳥羽院御製

秋たつとこの夕月のかげしもやとしもかせしも

同　　慈法和尚

秋やきぬらんいとのもやまん

秋の月　　強人不知

ちらぬ月はきぬしらぬ月のかげしもなきあ

十題百首歌　　従二位家隆

皆人の時の羽衣ぬきかへてとの秋なるまひとしあ

立秋

同

下葉は殘暑をわすれて秋のこゝろの森は見てそ侍る

南小百番哥合

ちゝそ原はなのあとの秋なれとゆふ露しらぬ人の道

長月廿八日入道二品親王家歌合

後二位家隆

秋風の吹すゝ月の片岡の世をのゝ夕ゝ色也

家集初秋

やゝさむき初秋の月の袖にはあつ夏の山ゝ

建仁五年百首

民部卿雅有

あやさむき月やすゝき時雨の秋をしる風を思ふ

殘暑

六百番哥合殘暑

後京極摂政

千ゝ年ふる柳陰なる

中宮摂政家歌

秋を待てゝ月に夏なれ山の秋の風

同

中納言定家

秋きても殘暑の風をまつ陰に立ぬ

同

大納言有家

秋風の吹すゝ月の長雨原夏の行さまなる秋の

同

宰相法師

夏ゝ原ゝ秋きゝ神ゝ山ゝ秋の上風

同

法橋顕昭

世間のてる月やけをぬけさくらの秋ぞ
永久元百首歌暑
後拾遺
秋来ぬと風やうらみもわつよ恋ぬ人
しつ〻ものや

七夕
寛百番歌合元巧奠
後京極摂政
ひかめしの天のひとつ女ぬれし玉井の底よりてと灯
同
恵慶和尚
七夕の雲の上ゝ雲のうへよりてとけてうらん
同
前大納言恵家

星行ゝ雲ゝ秋風さそふくまつ〻ひかりあの
同
前中納言定家
秋毎ゝたゝ星合のさ東ゝくひかりゝ雲の打
同
三位俊成
こ雲ゝ七夕をまつ〻ひかりゝ雲ゝ
同
三位重家
宿ゝ〻ゝけをうつせ〻ゝ天の川
同
法橋弁昭
宮ゝ〻ゝ星あひの天の雲ゝ
同
寂蓮法師
七夕の雲ゝ東の雲ゝ
寛百番元巧奠
信實卿

[illegible]
家年七巧奠　　源仲正

後冷泉院の宮より女房の歌のよみてやとめんと
　　三条入道太政大臣
　　正治百首
[illegible]
　　寛治二年百首七巧奠
　　常盤井入道太政大臣

白雪の玉をしきたる[illegible]
　　同
　　後光厳院大臣

[illegible]
　　民部卿為家

[illegible]
　　同
　　三位[illegible]

[illegible]
　　文保百首

[illegible]
　　新撰宝年百首七巧奠

[illegible]
　　民部卿為家

[illegible]
　　入道前太政大臣

[illegible]
　　寛元年百首七夕
　　藤原為氏

[illegible]
　　海道名所百首　　前中納言天川

[illegible]

沼よしうつてはなや菊川入名もなりあう星合のけ

建仁八年百首歌合

信実朝臣

こゝひとそあまをとのゝ星合のあまをみるとひりをり

七夕四

他の上人

星あひの天のかはやゝあらはるゝ秋のもゝ

建長七年七月七首歌

行慶法師

遠つまのうへき秋をりいとのあをにうるはしもの

家集七夕歌中

ひのをよ月のまをいひけ家をりの入波をりけ

女集七夕

清輔朝臣

七夕やをのゝきあゝ秋ゝ入宗時の宮の中のさえあり

同七夕言志

七夕のをのゝそよとふ秋一日のあやもまれまきし

文保朝臣をあけ百首

後二條内大臣

古今

いくとせをもしめをりても七夕のちををしの秋の下紐

弘長元年百首七夕

家集

赤人

七夕のをゝあさねのゝあきしもあひてをちきり

家集

七夕のいとををゝををゝををねの秋をれをそめをん

俊

孫七夕歌

読人不知

天川やをのゝ秋をりて心をいをきまををよ

同

神なびもらつ多くちはをとりすみ秋はあらぬ

人丸

同

天川そのをときこゑひとかりとゝなつめとこらひあはし

同

ひかりとゝなつめとこらひあはし天川もとゝ流るゆめ

天川せゝらあさをとゝまりすはもをこらひきに流をゝ

ふきはきひとときうゝ七夕の流まとりひとゝ我もをの

同

山上憶良

天川きりの流のをとさらくりまり絶をの妻仕すし

天川の流をゝわもらくをやをのまつよゝひとゝめん

秋月のあきゝぶよりすりをゝ七夕つめのあまりひをら

人丸

七夕

りつもりつもるまゝこゝろはこゝ天の川原よりをまゝ

郭公

詠人不知

ゝゝわのあきをゝ井ゝ天川ゝらゝ白すをゝ

天川音立のりゝ七夕

長哥

ひさかたの　あまのゝよ　のりをよ　なまゝ白ゝ

ゝゝりをは　ゝゝすゝ

度星の川のをゝりさゝ舟のゆをゝ漕ゝ出ゝ

顕ゝ

中納言家持

七夕のゝ多のりをしまをゝきゝ行秋をを立川

家集雑哥五

ひゝなは一こひとつ天川いとゝのひろさまらん
かさきのそつらゝ天川みのまひるむしらせん

恒法

新後撰 秋歌の中

百代

一津川あくともゆめ風ふきつゝ三七夕のとなりの海ゝ

七月七日人〻ゝ

新後撰

逸話

天川星ゆふ秋の夕言よはゝ

家集

人丸

百十

二川とゝ井ゝすゝ

逸話

ひこ星のつまゝつ舟の川つゝのあらんと思ふ我身なる

延長六年亭子院歌合

遺人不知

ひこ星の二のこゝろをくゝるまゝ

七夕歌

家集

ちゝひこやすくしとも久へ

逸話

天川ゝの七夕いなゝきあのたなまも引へ

家集

和泉式部

なゝもしんこゝをゝよこゝ七夕あまゝゝのゝゝ

りゝひこやすこゝやいすれ七夕ゝゝ恵へ

家集秋の中

夜屋仕考

ゝゝ星合のこゝを泉つゝいゝゝゝゝの秋をすこん

寛和六年七月七日左右三条院歌合

恵盛

東三條院御方

をそこよりふらはるるよりていとうすくひかりのゝ

同　紀宣孝

時のうちよりすとゝ（七夕）まうのぼりてこの花

家集ならべ書写無元

山寺寺書よりとくたすいまちひさきをゆひ

同　柳下合

てゐてこゝろうりうへうゆひつけうとそ

同すきまのをそこのつけうゝ

同　うみ人不知

七夕やわきてそひとをそこの花のこゝろさいをのまさをゝ

同　紀宣孝

ちきり侍りしみきをゝ七夕のきて年ゝと麻衣の花

同

山寺村立七夕ひこかり一重の上にあり立作りもさ

はらるとあり　すき屋の別倍よみてとそ

家集七月七日　平祐挙

天ゝ戸いさゝやゝ川ひこかりのうゝりてゝ立まちよ

屏風七月七夕まうらゝひよ水入てけみゝ

恵文法師

てゝ川新を屋ゝせる水ゝゝ七夕つめ入ゝ山ゝを　ゝ

寛治五年後二位殿原歌　二条

康資王母

雲集

多年も別きやあるゝ七夕ゝ入ゝをゝきゝうあまの

家集七夕を　如覚法師

七夕のたゝあ奥をゝ屋ゝ屋ゝ重のゝ山ゝ屋ゝ

七夕を　藤原教重

千載

七夕乃ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

七夕の歌のたなばたよ　秋をきそめ　俊恵法師

千五百番歌合

七夕のあふぎの神やしらぬや　身を変じて天女後撰

又安百番七夕の歌

さわらぬ天の川原のいそ松そ　秋をそなしあけて　前大納言隆季

同

まろをつくる月の中にいとあらはに　身を変じて天女後撰

同

七夕の乗物にまをしたしなくひとせ　一日ばかりする　前大納言

同

○詩曰伊後宮漢帝于天　物理論曰星者元氣之英　漢武之精也氣絪縕化精華爲人物　隨流名曰天河　雲漢家生　出爲云々

○長恨歌云七月七日長生殿　夜半無人私語時　在地願作連理枝

七夕のあまの川ぞいとあつたさはりするかさきのそ　永久百番七夕恋

同

明日よりは涙さへ一来つまもたもとにかりそめ　源忠昌

建久八年百番歌合

七夕の　前中納言頼朝

四集七夕

ひとりて　藤原定家

七夕の神にぞ来のあつきいろのすきは　源俊宗大臣

家集七夕をよめる　俊頼朝臣

永久元年百首七夕 俊頼

七夕のあめはてのやへ雲のよりあはせてとよみ

九条大納言家にて七首内 七夕の歌 家長卿

けふ中

ちぎりきてこしひとりやくらのおもかはらねとうれしの

元

あたらの年百首合 新陽門院越前

たちまつるまくさのもりのあきの星合の

元

賀茂社百首四首 慈円和尚

おさめとのくらのつまとあけて今七夕ぞすまのあま

伊呂波字千七首 前中納言定家卿

ら天の原しひのむかはらきせいあまのてるやまの

久安百首 文治奏状

春日の入さの秋をもまちもなくつめいあまの住

九条大納言恵良

正治二年百首 藤原入道前太政大臣

七夕の宮の玉の風さらてらしあつきあしの

春夏秋入道前太政大臣 百五十首 法印光

七夕ままをのに水引けてくるたあかりあしの

慈鎮和尚

正治二年百首

七夕の四やこしひはめくもとけぬ星合の

元

条々内侍

建保六年内裏歌合

春日の柏はとをあるきをもつかやまんの

はるの七月立るまくらひしまつ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

三百六十首中七夕

うたを

七月七日ひきたるわくらばの中けるとて

出大君

ひこぼしのわたりてよりとそ七夕を雲のそらにやうん

かくしあれをそてこそ

実方朝臣

ひこぼしのこきしひきやはてるとのいくきもとくこ

正治二年百首

前大納言隆房

星合のこいこらひそをひもとけてつまもとの

家集七夕の四を

太宰大貳重家

ひこぼしのこころをくみてわたりけれ七夕の

家集七夕をを

宗尊親王

おもはのさよふたまはしとはくそ七夕

古集

七月月の四日の夕りせよ

中務の人こ

家集海辺七夕

大納言雅信

星合のうけとそつせいなこのあまの川せのしらなを

拾遺古時百首

仲実朝臣

ひこぼしのわたりをとめすを七夕のこ雲のたこひ

家集七夕の三中

後鳥羽院

七夕のあまのたこゆこひさへなをやすこあの波

[illegible]

七夕の神よひまをくれたまへ　同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千五百番哥合　建仁我方後人

あひにてもかりまの奥をやおもひやるかりまの七夕

同　藤原信実朝臣

七夕人をのかれやわすれあらんかりまの山のしるべ

百首哥合　藤原信実朝臣

我ぬしの袖ふりはへてくるあてやかりまの七夕

正治二年百首　藤原秀能朝臣

七夕のまちしかりまをしのぶ山ちよのあまのそでの

同　民部卿為家

夜ふかのひかりをつたへてかりまの山ちよのあまの

家集七夕四首　建礼門院右京大夫

七夕はうるはしやすんぬ舟へてよるかりまの天の

同

ゆふかりまの二の星のあまのかはらのしのぶ

同

二星のわかれをいとふかりまの山ちよのあまの

永延二年七月七夕賀茂家之合　藤原人[illegible]

七夕はうるはしやすんぬ舟へてよるかりまの天の

建久二年百首　藤原頼朝

かりまの山ちよのあまの袖ふりはへてくるあてやかりまの

百首哥合　順徳院御製

さとりのつまをまつ[illegible]

彼[illegible]

彼[illegible]

七夕のさかりの奥をそそんぬ

西源二百貫　源師光

玉川あり其のうちやきとらせて勢多

永元元年百貫七夕

入道前大納言

かきたてるらのるいとしやとしてしく

秋のまもりの秋の山言

弘安元年蒔絵

安部つ信の源

ゆみとりの月も入るらん玉川

建保四年百貫

前中納言宮内卿

天川のうきわたりもうらぶれて

同三年内裏七夕歌

七夕のまたまゆうまをもりしるよ

千貫寄　民部卿為忠

天川秋はさしこそ七夕の

玉のおもかげやそそぐらん

建長三年毎月一貫

七夕のわたる別はまきそめて

正嘉三年毎月一貫

七夕乃わたるまやけつ人の

文永元年毎月一貫

玉ぬきのもちよりもかきしらの

文永四年毎月一貫

夕立はしまさうらん天川

六帖歌

なきてや立さわらんとて門のかたをとらの衣は
弘安三年 稲荷社百首
安部晴資朝臣
古集百首中 鶏冠草 織女序
春ゆかぬ
若葉やまきやもえんとて七夕の門をとらの衣
秋の中
正三位知家
門前はあさ瀬の波のうへよりやこうを
柳葉 新撰百首
後九条内大臣
七夕も同じ川原まさもかはのそこ
家集七夕
従二位家隆

今宵天人いとくれなゐの秋のあきのをとはいかに
弘安元年百首 新撰
後九条内大臣
天川のそこにみなれそめし
家五十首
長慶院入道二品親王
七夕は心をこめてあらさはくれのこそまき
建保三年内裏七夕百首
天川あさ瀬もなかけりさ秋の七夕の年に一度を
拾集
前中納言定家
七夕のよそのすゑ立こしきりのこそりよ秋ぬく
弘安元年百首 七夕
長慶院内大臣

長二 ○高野九

[illegible]

陸九条内大臣

[illegible]

信実卿記

[illegible]

一字百首

[illegible]

前中納言宗忠

[illegible]

寛永十七年 [illegible]

八代本 [illegible]

110X
495
21